

論文

『二宮尊徳の報徳思想に学ぶ』
—人口減少・財政破綻・低成長時代をどう生きる—

八幡 正 則〔鹿児島大学稲盛アカデミー非常勤講師〕

Reflections on Ninomiya Sontoku's concept of grateful thought

Living in the age of population decrease, finance failure and low economic growth

HACHIMAN Masanori〔Part-Time Lecturer, Kagoshima University, Inamori Academy〕

キーワード：人口減少時代、四つの貧困化、一円観と環境保全、知足の経済学、報徳の生き方

目 次

- 1、今、なぜ二宮尊徳か
 - (1) 人口減少時代の四つの貧困化
 - ① 国家財政の貧困化
 - ② 成長路線の貧困化
 - ③ 環境資源の貧困化
 - ④ 幸せ感の貧困化
 - (2) 二宮尊徳翁の生きた時代
 - (3) 四つの貧困化の克服
 - ① 「報徳仕法」を手本に財政破綻の建て直し
 - ② 「分度」を弁える低経済成長下での生き方
 - ③ 「一円観」に基づく環境破壊の回復と保全
 - ④ 「自助と推譲」による住みよい社会の建設
 - ◇ 「幸せな生き方」の再吟味
 - ◇ 幸せ感が得られる「自他振替」の教え
 - ◇ 個人の幸せと社会関係
- 2、二宮翁の教え
 - (1) 四綱領
 - ① 至誠
 - ② 勤労
 - ③ 分度
 - ④ 推譲
 - (2) 天道と人道の教え
 - (3) 人道すなわち報徳の道
- 3、低成長時代における「報徳」の生き方
- 4、むすび

1、今、なぜ二宮尊徳か

(1) 人口減少時代の四つの貧困化

2010年代は、日本の開闢以来はじめて人口が減少に転じた幕開けとして、歴史に刻まれるであろう。喧伝された「少子化高齢化時代」から、いよいよ本格的な「人口減少時代」に入ったのである。わが国（朝鮮と台湾を除く）の歴史に、人口停滞の時代はあっても減少の時代はない。一国における人口の増減消長は、その国の盛衰を表わす。したがって、問題は単に人口の減少のみに止まらない。関連する様々の課題が山積しており、まさに「開闢以来の一大転換期」にある。

それらの課題のうち、四つの貧困化を問題としたい。

①国家財政の貧困化

日本が先進国最大の借金国となり、財政が極度に貧困化したこと。

②成長路線の貧困化

少子高齢化で人口が減少に転じ、経済成長路線が貧困化すること。

③環境・資源の貧困化

環境破壊が進むとともに、小資源国日本の資源が貧困化すること。

④幸せ感の貧困化

市場主義の浸透で、「幸せ感」と「自立共助」が貧困化したこと。

これらは、今までの歴史には例がない。

この四つの貧困化をどう克服していくのか。われわれに明日への展望は開けるのか。

よく「歴史は繰り返す。歴史に学べ」といわれるが、このようなかつて経験したことのない貧困化について、学ぶべき史実があるのだろうか。

歴史には盛衰がある。隆盛が続き爛熟すれば、衰退の兆候が現れ、やがて衰退してゆく。その過程で滅びてゆくものもあろうが、必ずそれを乗り越えるものが現れる。それが生き残って、新たな歴史を切り開いてゆく、というのが歴史の教訓である。先人たちは、衰退にまつわる幾多の困難を乗り越えてきた。だからこそ、今日の私たちが存在することを思えば、置かれている歴史的背景によって姿形は変わっていても、幾多の教訓があるに違いない。そういう視野の中に、幕末の低成長期に活躍された偉人・二宮尊徳翁の思想と業績が浮かんでくる。

過去において、二宮尊徳翁が歴史に大きく登場する場が二つ挙げられる。

ひとつは明治以降における資本主義の発展に、大きく寄与した企業経営者たちの規範となったこと。いま一つは昭和恐慌のときである。

前者の場合、翁の教えを手本にしたと、自ら語る著名人として、安田善次郎、渋沢栄一、鈴木藤三郎、御木本幸吉、鈴木馬左也、早川千吉郎、豊田佐吉、大原孫三郎、松下幸之助、土光敏夫などが挙げられる。

後者の場合、恐慌で疲弊した農村の再生に、産業組合が活発な運動を展開するが、運動の根幹に二宮翁の「報徳思想」があり、全国至るところで語られかつ学ばれた。

(2) 二宮尊徳翁の生きた時代

二宮尊徳翁の生きた時代は、今の世に酷似している。

翁は、天明7年(1787)に生まれ、安政3年(1856)に齢70歳で没している。徳川幕府250年の後半期であり、没後12年で明治維新となるが、この時代は幕末の低成長期で人口もほとんど増えていない。

すなわち、徳川家康が、慶長8年(1603)に江戸に幕府を開いたときの日本の人口は、1200万人程度であった。それが、戦国の世も終り社会が安定したことから田畑の開墾が進み、人口も増えて江戸は百万都市にまで成長するのである。元禄時代までの100年間がいれば高度成長の時代で、人口も2倍以上に増えている。

ところが、その後の120年間は、天明の大飢饉や安政の大地震などの災害や飢饉が度重なり、人口も増えなかった。穀物の収納も一向に増えず、藩の財政は逼迫して、武士への扶持米支給も滞った。一方、安定経済の下で商業流通が活発化し、米取引所ができるなど市場経済が発達してきた。資本主義萌芽の時代ともいえよう。その流れはやまず、結果として商業流通に、ほど遠い武士階級は、租税徴収に躍起ならざるを得ず、民百姓はますます酷税に苦しむ構図となった。百姓武士ともども借金暮らし、各藩は高度成長で蓄財した豪商から多額の借金を余儀なくされていた。まさに、現今のわが国の政府が国民から国債という名目で借金している現状そっくりである。

そういった状況の中に、小田原藩の栢山(かやま)に二宮尊徳翁が生まれた。

【二宮尊徳翁の小史】

翁の名は金次郎(もとは金治郎)であり、尊徳は没後に尊称した贈名である。

1787年(天明7年)に、2町3反の田畑を持ち、小田原の近傍で「栢山の善人」といわれた父母のもとに生まれ、幸せな幼児期を過ごしていた。ところが、14歳のときに近くの酒匂川が洪水で決壊し、田畑がほとんど土砂に流されてから一家の不幸がはじまった。洪水の後の無理から、父が病に倒れて病死し、母もまた2年後に亡くなった。親族の話し合いで、幼い二人の弟は母の里に預けられ、16歳の金次郎は本家筋の叔父万兵衛方に身を寄せて、ついに一家は離散してしまう。

金次郎はそれにもめげずに、頑丈な体を元手に、昼は叔父の仕事を懸命に手伝い、夜は遅くまで父の残した儒教や仏教などの書物を読みふける。そのころは「百姓に学問は不要」といわれた時代である。叔父に灯油が減ると叱られると、友人から一握りの菜種を借りて荒地を耕して種を蒔き、一年後に150倍の菜種を収穫した。それを隣村で灯油に替えて、書物を読み続けるのである。また捨て苗を拾って空き地に植え付け、秋には一俵の稲モミを収穫した体験から「積小為大」の法則を発見し、自立への強い信念を抱くようになっていくのである。

19歳で叔父の家を出て、生家の廃屋を修理して独立した尊徳は、近隣の農家に作男として賃金を稼ぎ、また小田原城下に薪売りに行くなどして、母の死後に残されていた6反歩を元に、徐々に田畑を買い戻し、5年後に1町5反、31歳になった頃には、父の代をしのぐ3町8反の小地主になった。

31歳で家老服部家の若党となり、財政の建て直しを行い、評判となった。それが藩主大

久保忠真公（若くして幕府老中になった名君）の耳に入り、藩の財政復興に当たらせようとした。しかし、農民金次郎の登用に老臣たちが抵抗したので、分家宇津家の所領で廃村同様の桜町（現在の真岡市の一部）の復興を依頼した。

命を受けた金次郎は、家屋敷、田畑一切を売り払い一家を挙げて桜町陣屋に赴任した。36歳のときである。そこで、人心荒廃した農民や役人たちの妨害に遭いながら、苦難を乗り越えて10年後に完成して「野州聖人」と称えられることになる。

さらに、近隣の谷田部、茂木、烏山など諸藩の依頼で財政立て直しと村々の復興に尽くし、遠く福島相馬藩の財政建て直しをも指導した。その後、幕府の求めに応じて日光領の財政建て直しに取り組んだ。その日光領の復興に赴いた67歳のとき病に罹ったが、病身の身でなお仕法に当たった。しかし、3年後に病勢が悪化し、1856年（安政3年）10月に70年の生涯を閉じた。明治維新に先立つ12年前である。

翁が、直接また間接に復興に携わった数は600余に及ぶという。

墓は、日光今市の如来寺境内にある。

法号 「誠明院功譽報徳中正居士」

（3）四つの貧困化の克服

四つの貧困化の克服を、翁の「報徳思想」に照らしてみれば、次のような局面打開の処方箋が描けるのではないか。

- ①「報徳仕法」を手本に財政破綻の建て直し
 - ②「分度」を弁える低経済成長下での生き方
 - ③「一円観」に基づく環境破壊の回復と保全
 - ④「自助と推譲」による住みよい社会の建設
- 以下、順を追ってみたい。

①「報徳仕法」を手本に財政破綻の建て直し

破綻した日本国の財政を一家の家計に例えてみれば、次のような構図となる。

【平成22年度の国家予算】

平成22年度の国の一般会計の予算書では、92兆3千億円の歳出を賄うのに、税収はわずか37兆4千億円にすぎない。公債という名の借金が44兆3千億円である。

一家の暮らしに例えれば、

923万円の家計を賄うのに収入は374万円しかない。筆筒預金などかき集めても106万円で、足りない分443万円を借金せざるをえない、といった構図になる。借金依存度は昨年37.6%だったのに、今年は48%に膨れ上がった。

年家計費923万円といっても、借金返済に206万円が充てられ、地方交付税174万円などを引くと、使えるカネは534万円しかない。そのうちの半分以上の272万円が社会保障関係費で厚生労働省の予算である。

これは、国土交通省56万円、文部科学省ほぼ同じ56万円、防衛省47万円、農林水産省

22万円を足しても181万円で、いかに社会保障費用が大きいかがわかる。

来年度予算編成が、さらに厳しさを増すことはいうまでもない。

国民は、すでに人口減少高齢化時代を実感している。

100年前の明治末期、日本の人口は約5000万人であった。100年間に倍以上に増えたが、あと3世代を経れば半数近くまで激減する。人口減少高齢化時代に経済成長が期待しにくいのも国民は知っている。

菅首相は、直前に財務相を経験し、財政立て直しが緊急の課題であることを強く感じたのであろう。参議院選挙に臨んで消費税値上げに論及し、唐突さもあって惨敗した。しかし、国会がいかに紛糾しようとも「与野党を越えて税制を論議しよう」というのは、避けて通れないのは自明の理である。

今、もし二宮尊徳翁が居られたら、日本の経済社会の危機をどう認識され、どのような克服の手立てをお考えだろうか。

【財政の再建】

「入るを計って出るを制する」は、経世済民の原則である。

二宮翁は「分度」を発明された。

分度とは分限に応じた度合のことである。家計にあっては、収入に応じた支出の限度であり、赤字を出さないことである。分度が過ぎれば家計は破産して、家族は路頭に迷い生活保護を受けるほかない。企業は収支つぐなわなければ倒産し、再生法に頼るか解散するしかない。国家の収支償わざるばあいはどうなるか。

財政破綻とは、いうまでもなく「日本国の経営破綻」である。破綻への論理は「まず費用ありき」である。そして「費用を賄う収入が足りなければ借金すればよい」となる。

借金の道は開かれている。ただし、必ず「返済する」が絶対要件である。ところが、なぜか一国の経営ではこの厳しさに欠ける。

いまは昔、赤字国債の発行に皆が神経質だったころ、ある経済学者がこういった。

「国債は、国が国民の金を借りるのだから、主人が奥さんから借りるようなものだ」と。聞いたとたんに「これは眉唾モノだ」と思ったが、尻馬に乗った輩が「一方で利子を払っており、国債を買った人の所得になっているから問題はない」との理屈をつけた。この論に、目先しか見えない政治家と経済官僚が飛びついた。理屈はその通り。しかし、それは一片の理屈でしかない。結果はどうか。

彼らは異口同音に、いずれ景気が回復して税収が上がるから、それで借金を返していけばよいと言った。今後も右肩上がりにゆくものとしか認識しない、まことに杜撰極まりない見通しを繰返してきた。そして今、財政は硬直化し、さまざまの歪みが生じ未曾有の財政危機に直面している。「国債は奥さんからの借金」論者は、最近の著書で、いいわけじみたことを書いているが、それで帳消しになるわけではない。

二宮翁は、口舌の徒を忌み嫌った。翁の哲学は「知行合一」である。王陽明は、知ると行いは一つでなければならないという。翁のばあいも単に大脳皮質にとどまる知識は、無

意味で「知らない」に等しい。

財政再建は、どんなに理屈をこねても「出るを制する」以外にない。税収を増やす、すなわち「入るをはかる」ために財政投融资をやり、生産増でパイを大きくする、いわゆるケインズ政策等も選択肢の一つではあるが、そうなったとしても、二宮翁のいう「分度」を定め、出口をきちんと制御しなければ、垂れ流しである。この分度がなかなか決まらない。分度は出口を防がねばならないので、行政改革は必然である。

財政再建は、50年掛かろうが100年掛かろうが取り組まねばならない。180年前に二宮翁が「報徳仕法」としてそのやり方を確立している。

【心田の開発】

いま一つ、二宮翁のいう「心田の開発」を急がねばならない。

最近の憂うべきは、あまりにも「公に寄ってたかる依頼心」の肥大である。ケネディの言葉に「我々は、国家に対して何ができるか」がある。およそ地域社会や国家を形成しその恩恵に浴する者が、地域や国家に果たすべき義務があるのは当然である。

二宮尊徳翁は、根底に「至誠」を置き「勤勉」と「分度」と「推譲」を説かれる。

われわれは、地域社会や国家を離れて生きてはゆけない。翁は、まず、わが身の暮らしをよくするために「勤勉」に働く。そして暮らしに「分度」を立てる。分度を守り「儉約」を心がけて暮らした余りを「推譲」する。後日や来年のために、また災害に備えて蓄えるのを「自譲」というが、それだけに止まらず、周りの人々に、そして広く村落に、さらに国に推譲していく。すなわち「他譲」である。

そうは言っても、人々の心がその境地に至らねば何にもならない。ときは幕末の封建時代。苛酷な圧政に苦しみ、生きる希望を失えば、人々は自暴自棄になる。困苦に耐える心、勤勉に働く心無くし、少しのものを奪い合い、博打にふけるような風潮がはびこるのである。翁が桜町の復興に赴いたときの人心は、まさにそのような状況にあった。博打と任侠で有名な国定忠治は、桜町の近くの国定村に生れた翁と同時代の人である。

夜話に「我が本願は人々の心の荒蕪を開くにあり」として、次のように語っている。

「私の本願は、人々の心の田の荒蕪を開拓して、天から授かった善い種、すなわち仁義礼智信というものを培養して、この善種を収穫して、又まき返しまき返して、国家に善種をまき広めることにあるのだ」

「一人の心の荒蕪が開けたならば、土地の荒蕪は何万町歩あろうと、心配することはないからだ・・・云々」(二宮翁夜話六三)・・・以下、夜話とする・・・

一人の心の荒蕪を開くとは、核心となる立派な指導者を一人育てることが出来れば、土地の荒蕪は何万ヘクタールあろうとも心配することはない。必ず開けるからだ。そなた(大沢勇助)の兄大沢小才太が、片岡村を復興したではないかと言いきかせている。

桜町では、まず暁に出て一軒一軒を訪ねて、暮らしの実態を見聞きする。そして、雨漏りの茅葺屋根を葺き替え、壊れた家屋を修理し、便所を改修するなど。いわゆる「回村」の行を徹底して、人々の信頼を得るとともに、勤労の大切さを説き「心田の開発」に努めた。後になって、翁は他から「報徳仕法」の施行を依頼されても、その地の人々の「心田

の開発」がなされていないければ、「天機未だ至らず」として動かなかった。

②「分度」を弁える低経済成長下での生き方

およそ100年前、明治末の日本の人口は約5000万人である。現在の人口、約1億2700余万人に至る100年の間の前半は、戦争に明け暮れ、海外への膨張があり、太平洋戦争で国土が焼土化するなどの変遷があった。敗戦後、国民の復興への尽力と幸運にも恵まれて、経済成長を続けて、人口は約2.5倍に増えた。平均年齢も伸び続けて、世界一の高齢化社会を迎えたが、今、頂点に達し、今後は減少の道をたどることになる。およそ3世代を経た100年後には、人口は半減し6000万人程度との推計もある。その他、いろいろな状況を勘案すれば、この間の経済発展は低成長かゼロまたはマイナス成長とならざるを得ない。

低成長で個人の暮らし向きはどうなる

日本国経済のパイが、大きくなることを期待できないとすれば、われわれ個人には一体どんな生き方があるだろうか。注意すべきは、マクロの一国経済とミクロの私経済は密接に関連するが、必ずしもパラレルではない。また、技術革新は経済成長があろうがなかろうが常に起こり得るし、企業の盛衰もお激しいであろう。

では、個人はどうなるか。国民経済の視点からは、国全体のパイが大きくならなくても、人口が減少するので、一人当たりの所得はさほど減らない、ということになる。ただ、一国の国防や警察などの安全保障の費用や、高齢化社会に増え続ける年金・介護など福祉費用の負担は、人口減少で分母が小さくなるので、一人当たりの負担は増える。

およそ、このような展望に立って、人生設計が組み立てられなければならない。

③「一元観」に基づく環境破壊の回復と保全

「国敗れて山河あり」という辞がある。何となく寂寥感が漂うが、これを「国敗れても山河あり」と「も」を入れて読めば、山河が頼もしく感じられる。

国が敗れても山河ある限り、再び立ち上がれる。それが先人の教えである。事実、先の世界大戦の敗戦で、まさに「国破れ、国土は焼土化」したが、たゆまぬ尽力と幸運にも恵まれて、再び国際社会に復帰できた。しかし、地球上で戦争はつづけられて自然破壊は止まない。また、経済のグローバル化が進むにつれ、市場原理と競争の激化で、環境破壊は止まるところを知らない。さすがに、これでは地球環境が益々悪化し、人類の生存が危ぶまれるとして、国連を中心に、たとえば炭酸ガス規制の動きなども高まってきているが、各国の利害が錯綜して展望は見えない。

このような環境破壊をもたらした根底に、「自然は征服すべきもの」とする西欧文明の思想があることは、改めて語るまでもない。そして、それを救う道は、「自然と共生する」という東洋思想にあることも、今や多くの人の常識となっている。

「自然を活かして、利用しつつ共生してゆく」

その言葉も意味も知っているが、しからは、日常生活でどう活かしていくか。

原始農法に「略奪農業」というのがある。作物に肥料をやらずに収穫する農業のこと。山林を焼いて畑にする。そこには長年にわたって蓄積された腐植などの地力があるので、その地力のある間は作物も育ち収穫も得られる。地力が収奪され尽されれば、やせ地となり荒廃してしまう。ただし、農耕民族の偉さは、収奪し尽くさずに「自然再生力」を残したことにある。さらに休耕や輪作を取り入れて地力を保全しつつ、農耕を永続させることを見出したのである。まさに、保全とは二宮翁の説く『推譲』にほかならない。

近代文明は自然を開発し、収奪することを発明した。しかし、収奪のみで保全が十分になされなければ開闢の昔に戻ってしまう。伐採されたあとに緑の山林を期待できない砂漠化現象が、地球上の至るところで起きている。

自然をはじめ、さまざまの環境のおかげを蒙って生きているのに、資源を奪うことのみで熱中してきたツケが、人類の生存を脅かす形に表れてきたのである。

二宮翁は、神道と儒教と仏教の長所を取り入れて、自らの教えを「神儒仏一粒丸」と言っておられる。すなわち神道を開闢の道、儒教を治国の道、仏教を治心の道と崇めておられる。もちろん仏教にも通暁されて、自然の大切さ、草木、虫魚に至るまで、みな悉く仏性があるという悉皆成仏（しっかいじょうぶつ）の教えを随所で語っている。

自然と向き合う心構えについて、次の教えがある。

【万物ことごとく神・仏】

「翁のことばに、人はもちろん、鳥獣・虫魚・草木にいたるまで、およそ天地の間に生々するものは、みんな天の分身ということが出来る。なぜならば、ぼうふらでもかげろうでも草木でも、天地の造化の力を借らずに、人力でもって生育させることはできないからだ。そうして人はその長であるから、万物の霊長という。長である証拠は、鳥獣・虫魚・草木を自分勝手に支配して、生かそうが殺そうが、どこからも咎めがない。このように人の威力は広大だが、しかし本来は、人と鳥獣と草木に何の区別があろう。みんな天の分身なのだから、仏道では悉皆成仏と説いている。わが国は神国だから「悉皆成神」というべきだ。それなのに世人が、生きているときは人で、死んで仏になるというのは間違いだ。生きて仏であるからこそ、死んで仏なのだろう。生きているうちは人で死んだら仏になるという道理はありえない。生きてさばの魚が死んでかつおぶしになる道理はない。林にあるときは松で、切ったら杉になるという木はない。だから生前から仏であって、死んで仏となり、生前から神であって、死んで神なのだ。世には人の死んだのを祭って神とすることがあるが、これまた生前神であったからこそ神となるのだ。この道理は明白ではないか。神といい、仏といい、名は異なっても実質は同じだ。国が異なるから名が異なるだけだ。私がこの趣旨を詠んだ歌にこんなものがある。

「世の中は草木もともに神にこそ 死して命のありかをぞしれ」

「世の中は草木もともに生き如来 死して命のありかをぞしれ」（夜話四四）

翁の自然観は、山川草木すべてに徳が在る、すなわち「万象具徳」である。

釈迦の説く「悉皆成仏」と相通ずるものがある。

さらに敷衍すれば、遺伝工学の解明するところによると、動植物の遺伝情報DNAの記

号は、すべてA（アミン）、T（チミン）、C（シトシン）、G（グアニン）の4文字で書かれているという。まさに、生きとし生きるものは皆同じである。前世紀に釈迦が説いた「生きとし生きるものは皆同じ」が、近代科学の先端をゆく遺伝子工学によっても証明されたのである。

二宮翁の語る「万象具徳」は、さらに岩石、鉱物、水など無機物はもちろん、風雨や潮の干満、寒暑などの諸現象をも含む、森羅万象すべてに徳ありという概念である。ここまで思い至れば、もろもろの環境とわが身は「一つ」という翁の「一円観」に到達する。

天と地、昼と夜、明と暗、右と左、高いと低い、自分と他人、わが身と環境、自分と集落、相手と自分、等など、すべて相對する「ものの半円」を見ている。その相對する半円を融合して「一円」と観ずる。融合するには、自他振替により相手のことに十分に配慮して、誠実に譲り合わねばならない。翁の「一円観」である。

人間の体は、地球の元素を借りている

世界ではじめてヒト・レニンの遺伝子を解説された、遺伝子工学の第一人者・村上和雄博士は、著書『遺伝子は語る』の中でこう述べている。

「人間の体は、いろいろな元素によってできあがっています。そして、それらの元素はすべて地球上にあるものです。ということは、私たちの体は、地球の元素を借りて成り立っているということがいえます。地球から借りた元素を遺伝子という設計図に基づいて組み立てると人間になった、といことです」

「それが証拠に、一定期間を経過すると、私たちの体は死んで、すべて地球に帰っていくこととなります。そういう意味では「死んだらそこで終わり」ではなくて、私たちは、グルグルと永遠に回り続けている可能性がある。そして、それを回しているのは遺伝子です。遺伝子があるから、次から次へと人間が生れてくることは間違いありません」

博士は、それを回しているのは遺伝子だけではなく、何かもう一つ、今の科学では証明ができないが、別のサムシングが存在する可能性がある。そのサムシングが、肉体の滅びたあとに、魂を後世に伝える原動力になっているのではないか、という。さらに魂の問題に言及しているが、本題から離れるので、ここで留めておく。

要は、環境破壊に歯止めをかけ、修復し保全していくには、森羅万象の恩徳を受けて活かされている、その恩に報いなければならない。そういう認識を持つこと。すなわち「心田の開発」が大切なのである。ここまでくると、尊徳翁の「報徳」という思想が鮮明になってくる。

④「自助と推譲」による住みよい社会の建設

住みよい社会とは、人々が「幸せ感」を持てる社会である。それはユートピアであり夢想社会だから、考えても仕様がないうる人もいる。だが、人間には生きてゆく中で、「幸せだ」と感ずるときがある。だからこそ、皆が幸せを求めて生きている。

◇「幸せな生き方」の再吟味

敗戦から立ち直り、高度成長の過程で得たものは果たして何だったか。

貧乏な時代に育った人間には、お金の有難さは身に沁みている。したがって多くの国民は「幸せはお金で買える」と思っていた。そのお金が、高度成長のおかげで国民のふところに遍く入るようになった。国民皆年金制度で餓死者もほとんど出なくなった今日、貧困者も居るにはいるが、昔とは比較にならない。

だが人々は、そのお金で「幸せな生き方」を買えただろうか。

改めて、「幸せな生き方」とは何なのかを考えてみたい。

幸せに生きる条件

古来、人間の幸せについての論は、哲人をはじめ多くの人々によって語られてきた。

私が過去40年間を過ごした農協界でも、協同組合運動は人間の幸せを実現する運動だとして、いわゆる「幸せ」論が多く語られている。そこで、協同組合研究所刊『協同組合とは』(旧版)で、幸せの前提条件とする「いのち」と「お金」と「自由と安全」について考えてみたい。

一つには、「いのち」

二つには、「お金」

三つには、「自由」

四つには、「安全」

通常、この四つの客観的条件が充たされなければならないとされている。

「いのち」の大切さは言うまでもない。いのちあってこそその幸せである。

「お金」は、生きて生活を営むかぎり、必要欠くべからざるものである。

「自由」については、世界各国の事例を見るまでもなく、思想言論の自由、行動の自由、差別なき自由など、「人類の歴史は自由回復の歴史である」といわれるほど、自由は大切な幸せの条件である。個人の自由はまた、社会的連帯によらなければ実現できない。

「安全」は、幸せの前に生きるための条件である。身に危険が及ぶような環境の中で、戦々恐々としている暮らしで、どうして幸せを得ることができようか。安全は、自分自身の護身にはじまり、社会的連帯により警察力を保持し、国防力に頼ることになる。

以上の条件が整えば、一応は平穏に暮らせる。また安心して暮らせるはずである。だが、皆が果たして「幸せ」になれるであろうか。

人が「自分は幸せ」だと思える幸せ感は、あくまでも主観の領域である。いかに客観的条件が整ったとしても、幸せかどうかは、本人でなければわからない。

人間には「欲」がある。人それぞれの欲には限りがない。その欲が充たされない限り、幸せだと感ずる「安心」の境地には至らない。

安心とは、辞書には「不安や心配がなくて心がやすらかなこと」とある。

たとえば、健康でお金もたくさんある。自由に暮らして身の回りも安全だとしても、子供が居ないので老後はどうなるだろうかとか、かねて懇意な人と仲違いになって、鬱々として心安らかでない。また、もっとお金を増やしたいので、寝ても覚めても金儲けのことがアタマから離れないなど。これでは「幸せ」を感ずる安心の境地にはほど遠い。

反面、お金もようやく人並みか。健康も人並みではない、といったような人が、質素な

身なりでも、いつも温顔で立ち居振る舞いがさわやかで、周りの人々とも和やかに付き合いされる。いつ見ても「幸せそうだ」という人もいる。

そこに「知足」すなわち「足るを知る」という幸せな生き方が、垣間見える。

「足るを知る」生き方

「知足富者」＝足るを知る者は富む＝は老子の言葉である。

しかしながら、欲望は人間の本性である。欲望のない人間は生きてゆけない。欲望があるから人間は勤労に励み、金銭や物品など欲しいものを手に入れる。経済成長も人間に欲望あってのことであり、資本主義は根底に人間の欲望を土台とする。そして、いやが上にも大衆の欲望の肥大化を図る。消費の拡大こそが経済発展の鍵だとする。消費の最たるものは戦争であるが、平和時には大衆の消費欲に訴える。そこでマスコミを通じて「消費者は王様」と持ち上げるのである。

理屈では、欲望が充たされれば満足し、幸せ感が得られるはずである。だが、必ずしも理屈どおりにはゆかない。それは、人間の欲には限りがないからである。

この場合、欲望の肥大度と満足度とは、相容れない。むしろ、欲望が大きければ大きいほど満足感は得られない。稼いでも、なお稼いでも満足感が得られない、というのは、往々にして見られる現象である。人間の不幸の根源というべきか。

大欲——不満足（満ち足りない）

小欲——知足（満ち足りる）

したがって、幸せ感を得るには「足るを知る」＝小欲—知足の心構えが必要となる。二宮翁は、欲望を否定しない。むしろ欲望を持って、と励ましている。

ただ、欲望が肥大して、「奪う」とか「略奪する」とかにまで嵩じてくると、必ず破滅するので、それを戒めて「中庸」を説いた。

小欲の目安をどう立てるか。翁はそこに「分度」を発明された。

◇幸せ感が得られる「自他振替」の教え

翁の教えの三本柱は、「勤労・分度・推譲論」と「道徳・経済一元論」と「天道と人道論」であるといわれるが、それらに関連して「自他振替」の教えがある。

世の中のことはすべて、右と左、上と下、表と裏、自分と相手とあるが、常に対するものを振り替えて、対する立場に立って、見直してみることがたいせつだと教えている。

八木繁樹氏（大日本報徳社・元副社長）は、自他振替を次のように説いている。

「たとえばここに一人のサラリーマンがいて、この人は月給が目的で働いているとすると、この人の働き、つまり勤労は目的である月給を獲得するための手段に過ぎないことになる。だから、仕事が忙しくなったり難しくなったりすると、「こんな安月給で働けるもんか」という気が起こる。この気持が、仕事の能率をも下げることになる。したがって月給も地位も上がらない。ますますイヤになる。こういう悪循環が起こることになる。

尊徳はここで「自他振替」をする。すなわち、自分が今日働かせていただけるのは、天地人一切の恩徳のおかげである。そのおかげに報いるために、今日一日、自分の労働をさ

さげなければ相済まないと考えて、報恩・報徳の心で働く。しかも報徳として働くのだから、その仕事内容はすべて善の実行であり、積善の実践という結果になるわけである。目的は月給の獲得ではなく、仕事そのものが目的である。しかもその結果は、積善の集積である。それに対して天道は月給を与えてくださると考える、すなわちこれが「自他振替」である。尊徳の勤労・分度・推譲論は、この自他振替の哲理が、その裏打ちとなっているのである・・・云々」と。

冒頭の命題、すなわち「幸せ感」が得られるのには、この自他振替の教えのごとく考えるのが、大いに役立つことは疑いない。

◇個人の幸せと社会関係

個人の自由が抑圧された封建時代からの脱却に、個人主義の果たした役割は大きい。その反面に、行過ぎた個人主義により、私欲の増大に歯止めが利かなくなり、いたるところに個人間の紛争、集団の間の紛争、国家間の紛争が巻き起こる。

島国で生きてきた日本人には、1400年の昔、聖徳太子の立てた「17条の憲法」の冒頭にある「以和為貴」（和を以って貴しと為す）とする伝統文化が醸成されてきた。

自分一人では生きてゆけない。人々から助けられて生きている。とくに農道をつくり、堤を築き、水路の整備など、共同作業の多い農耕民族はその感が強い。したがって、人と争って生きるのは不幸なことだ。相手を慮り、相手の身になって考える。相手と和やか付き合い合っただけで、幸せの根源であると、知らず知らずの間に身につけていた。今時の言葉でいえば「地域社会の教育力」とでも言うべきか。

二宮翁は次のように語る。

勤労によって得た自己の収入の中から、分度を立てて余財を産み出し、その余財の一部を社会のために提供することを、報徳では「推譲」という。尊徳翁の村興しの仕法の事業は、ほとんどの場合、何人かの人の推譲によって始められ、やがて多くの人たちの勤労と推譲に支えられて達成されていく。勤労し推譲して相互扶助に発展していくのである。推譲によって「自他両全」となり、それが永安の社会であると教えている。

さらに、相互扶助を組織化しなければ社会は豊かになれない、として「五常講」を提唱し作られた。五常とは、儒教でいう人間の守るべき仁・義・礼・智・信の五つの徳目のことである。講の始まりは無利息金の融通組織であるから、この徳目を掲げて、参加する人の連帯責任としたのである。これが後の「信友講」や「報徳社」に発展していった。日本における協同組合の発祥といわれる所以である。

「推譲」について、湯船の湯を例に譲と奪の教訓がある。

【湯船の湯の例で教える譲と奪】

「身近なたとえを引けば、この湯船の湯のようなものだ。これを手で自分の方へかき寄せれば、湯はこちらへ来るようだけれども、みんな脇から向うの方へ流れ帰ってしまう。これを向こうの方に押ししてみれば、湯は向うの方に行くようだけれども、やはりこっちの方へ流れて帰る。少し押せば少し帰り、強く押せば強く帰る。これが天理なのだ。

人間の手は、自分の方へ向いて自分のために便利にできているが、また向うの方へ向いて、向こうに押せるようにもできている。鳥獣の手は、これと違って、ただ自分の方へ向いて、自分に便利なようにしかできていない。人と生れたからには、他人のために押す道がある。それなのに、わが身の方に手を向けて、自分のために取ることばかり一生懸命で、先の方に手を向けて、他人のために押すことを忘れていたのでは、人であって人でない。鳥獣と同じことだ。なんと恥ずかしいことではないか。だから、私は常々《奪うに益なく譲るに益あり、譲るに益あり奪うに益なし、これが天理なのだ》と教えている」（夜話一七二）

すなわち「奪うに益なく、譲るに益あり」

これが、自助と推譲による住みよい社会づくりの基本となる。

3、二宮翁の教え

(1) 四綱領

二宮翁の教えは、一般に「至誠、勤労、分度、推譲の四綱領」といわれる。

私の恩師・三浦虎六先生は「至誠を根底に、勤労・分度・推譲の三綱領」と説いている。先生がいうには、勤労の教え、分度の教え、推譲の教えの3つは、ばらばらではいけない。「鼎の三足」はそろっていなければ倒れてしまう。だから、三足はすべて誠実でなければならぬので「誠実を根底とする三綱領」でよいのだと。つまり誠実というのは、勤労、分度、推譲と同列にすべきではない、とっておられた。どちらにしても、内容は同じなので、ここでは、一般的な四綱領で進めていく。

四綱領の出自は、翁の高弟・富田高慶著『報徳論』の自序の記述による。

「先生ノ道、至誠ヲ以ッテ本ト為シ、勤労ヲ主ト為シ、分度ヲ立ツルヲ体ト為シ、推譲ヲモッテ用ト為ス」と。

平たく言えば、「真心をもって一所懸命に働き、自分の分度を心得て、余裕があるようにし、その余裕の一部を社会のために譲る」ということになる。したがって、この四つはばらばらではなく、密接に関連している。

①至誠

至誠とは、広辞苑に「きわめて誠実なこと。まごころ」とある。二宮翁夜話に次のような一節がある。

「翁いわく、わが道はもっぱら至誠と実行にある。だから鳥獣・虫魚・草木にもすべて及ぼすことができる。まして人間はいうまでもない。それでわが道では才知・弁舌を尊ばない。才知・弁舌では、人には説くことができるが、鳥獣・草木を説くことはできない。それでも、鳥獣には心があるから、あるいは欺けるかもしれないが、草木を欺くことはできない。わが道は至誠と実行だから、米麦野菜・瓜でも茄子でも蘭でも菊でも、みんな繁栄させるのだ。たとい孔明を欺く智謀があり、蘇秦・張儀（シナ戦国時代の弁舌家）を欺

く弁舌があっても、弁舌をふるって草木を茂らすことはできまい。だから才知・弁舌を尊ばずに、至誠と実行を尊ぶのだ。古語（中庸）に「至誠は神の如し」といっているが、「至誠はすなわち神」といっても悪くはないだろう。およそ世の中は、知恵があっても学があっても、至誠と実行とでなければ事は成らぬものと知るべきだ」（夜話一三九）

誠とは、「実」であり「真」である。

「実」の逆は・・・「虚」＝うそ

「真」の逆は・・・「偽」＝いつわり・ごまかし

「誠」は・・・言+成＝言ったとおりに成る

至誠といえば、とかく人間の倫理とか心理状況のようにとられがちであるが、尊徳翁のばあいは、心で思ったとしても、実行によって表わさなければ意味がないのである。

私どもは、郷党の偉人・西郷南洲翁は私心なき「至誠の人」と聞かされて育った。

西郷さんが生まれたとき、二宮翁はすでに四十歳である。両者に交流はなくとも、その時代の教本は、四書五経だから、ともに『中庸』の「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」の意などは、十分に会得されておられたであろう。

私の母は、人間は陰日なたがあってはならないと言って、いつも「天知る。地知る。人ぞ知る」と唱えるのが口癖だった。私の世代の親たちは、「至誠」という言葉は知らなくても、このような言い方で子育てをしてきた。

②勤勞

勤勞とは、広辞苑に「心身を働かせて仕事に励むこと」とある。

二宮翁夜話には「勤勞は衣食住を得るため」とあり、開闢の道と言っている。人間として生きるために、開闢の昔より身についたものといえよう。西洋思想のカトリックは、額に汗して勤勞するのが美德であるという。ただ、額に汗するといっても、仕事（ワーク）の汗と労働（レーバー）の汗は質が違う。

二宮翁の教える勤勞は、鳥獣が棲家を作るような、いわば無自覚の働きではない。人間的な、主体的な目的を持つ、覚悟して自覚した働きを言っておられると思う。また「勤勞は人道なり」といわれるところから、利害や打算からくるものでもない。

勤勞・分度・推譲のうち、勤勞はものを生産し、新しい価値を生み出す。そして得た所得で生活の分度を立てる。それをしっかり守る暮らしをして余剰を生み出す。推譲に自譲と他譲があるが、それはあとで述べる。分度を立てるにしても、推譲を行うにしても、勤勞がなければ成り立ちようがない。

また勤勞は誠実でなければならない。作物を育てるでも家畜を飼うにも、手抜きをしたり、手入れを怠れば成果は得られない。怠惰に引かされる心情は誰にもある。それを、翁のいう「心田の開発」によって、勤勞に励むように変えていかねばならない。二宮翁夜話には、勤勞と怠惰によって、富者への道と貧者への道が繰り返し語られている。

なお勤勞には、身体的勤勞と精神的勤勞、または物質的勤勞と道徳的勤勞など、働くときと、ところと、人のよって、いろいろお解釈があることはいうまでもない。

勤労に関連して、有名な「積小為大」の法則がある。

【積小為大】

翁は、一家離散して叔父万兵衛方に厄介になっていたとき、夜おそくまで本を読んでいる少年金次郎は、叔父から「灯油がもったいない」と叱られた。そこで知人から、一握りの油種をもらい荒地を耕して蒔いた。そこで得られた菜種を灯油に替えてもらった。また捨て苗を拾って、荒地の水溜りを田にならして植え、秋には籾俵を収穫できた。そのような体験から「積小為大の法則」を体得された。

夜話に次の章がある。

小を積んで大となす

「大きな事をしたいと思えば、小さな事を怠らずに勤めるがよい。小が積って大となる。およそ小人の常として、大きな事を望んで小さな事を怠り、できにくいことに身をもんで、できやすいことを勤めない。それゆえ、ついに大きな事をしとげられない。それは、大は小の積んで大となることを知らないからだ。たとえば、百万石の米といっても粒が大きいわけではない。一万町歩の田を耕すのも、一くわずつの手わざでできる。千里の道も一歩ずつ歩いて行き着くし、山をつくるにも、一もっこの土を重ねてゆくのだ。この道理をはっきりわきまえて、精を出して小さな事を勤めてゆけば、大きな事は必ずでき上がる。小さな事をいい加減にする者は、大きな事は決してできぬものだ。(夜話一一四)

「いま、日本国中の田は、広大無辺無数といっているほどある。ところがその田地は、みんな一くわずつ耕し、一株ずつ植え、一株ずつ刈り取るのだ。その田1反を耕すのに、くわの数は3万以上になる。その稲の株数は、1万5千内外もあろう。その田から稔った米粒は、1升で6万4千8百余粒あるし、この米を白米にするには、一うすの杵の数は、1千5百か6百以上になる。その手数を考えてみるがよい。だからして、小事を勤めねばならぬいわれがよく知れよう。(夜話一一六)

③分度

「分度」は、二宮翁が発明した言葉だといわれる。

広辞苑には、分限度合の意であるとして「二宮尊徳の創始した報徳仕法で、自己の社会的・経済的実力を知り、それに応じて生活の限度を定めること」とある。

四綱領で「分度をもって体となす」と言っているが、「体」には、身をもって行うこと。体験・体得という意味がある。したがって、「分度は体」というのは、暮らしの実践そのものを指している。

すなわち、一家においては家計を、企業にあつては経営を、国・県・市町村では、財政を運営する基本となるものである。

二宮翁夜話の中に次の一章がある。

「わが法は、分度を定めることを本とする。この分度を確固と立てて、嚴重にこれを守ってゆくならば、荒地が何ほどあつても、借財が何ほどあつても何の恐れも心配もない。わが富国安民の法は、分度を定めること一つにあるからだ。一中略一

分度を越える過ちは恐るべきものだ。財産のある者は、一年の衣食はこれで足りるとい

うところを決めて分度とし、分度外は多少にかかわらず譲って、世のためになることをする。こうして何年も積んで行ったならば、その功德たるや無量だろう。釈迦は世を救うために国も妻子も捨てた。世を救う志があるならば、おのれの分外を譲ることぐらい、どうしてできないはずがあろうか」(夜話一六五)

④推譲

「推譲」とは、二宮翁の「報徳的推譲」というべきで、単なる社会奉仕というようなものではない。その根本は、神道(かんながらの道)から汲んだものといっている。

開闢の昔、われわれの先祖は、荒野にはじめて一畝を入れた人々を神と崇め、その中心に天照大神がいるとした。そして人々は、自分の生産物を自分の代に全部消費しつくさないで後代に譲った。田畑を起こし、道路をつくり、町をつくり、森林を造成するなど、今の言葉で言えば社会資本、すなわちインフラを整備し、それを遺産として残してきた。二宮翁は、人類の発展の基本は、社会資本の蓄積すなわち「推譲」である、と喝破している。だから推譲は時間的流れの中にあり、同時代的な社会奉仕の蓄積とも考えられる。

したがって、社会が発展の方向をとればとるほど、推譲はますます必然となり、推譲の反対の搾取・略奪というようなものは、ますます非合理的なものとして明らかになる。

「奪うに益なし」

「譲るに益あり」

二宮翁夜話に次の章がある。

【推譲の段階】

「十銭とって十銭使い、二十銭とって二十銭使い、宵越しの銭は持たぬなどというのは、鳥獣の道であって人道ではない。鳥獣には今日のものを明日に譲り、今年のを来年に譲るといいう道がないが、人はこれとは違って、今日のものを明日に譲り、今年のを来年に譲り、そのうえに子孫に譲り、他人に譲る道がある。雇い人となって給金をとって、その半分を使って半分を将来のために譲り、あるいは田畑を買うとか、家や蔵を建てるのは、子孫へ譲ることだ。これは世間で人々が知らず知らずのうちにやっていることで、これでもちゃんと譲道なのだ。だから、一石の者が五斗を譲るのも実行できないことはないだろう。なぜかといえば、わがための譲りだからだ。その譲りは教えがなくとも出来やすいが、これより上の譲りは教えがなくではできにくい。

これより上の譲りとは何かといえば、親類・友人のために譲ることだ。郷里のために譲ることだ。なお出来にくいのは国家のために譲ることだ。この譲りでも、しょせんは自分の富貴を維持する結果となるのだけれども、眼前、他に譲ることだからむずかしいのだ。だから、家産のある者は、つとめて家法を定めて、推譲を行うがよい。

譲りの道は人道であって、人と生れたからにはどうしても譲りの道がなければならぬのだが、人により家によっては、年寄りや子供の多いところがあり、病人があるところもあり、厄介のかかる者がいるところもあるのだから、軒並みに法を立てて、厳重に行えといったところで行われるものではない。ただ、富裕者にはよく教え、有志の者によく勧め、行わせるがよい。この道を勤める者は富貴や榮譽が集まって来るし、この道を勤めな

い者は、富貴や栄誉がみんな遠ざかってゆく。少し行えば少し集まり、大に行えば大いに帰する。私のいうことは決して違わないはずだ。世の中の富貴者に教えたいのはこの譲道だが、ただ富者ばかりのことではない。また金や穀物ばかりの譲りではない。道も譲らねばならぬ。畦も譲らねばならぬ。言葉も譲らなければならぬ。功績も譲らなければならぬ。そなたたち、よく勤めるがよい」(夜話一七一)

すなわち

『自譲』は、教えなくとも行いやすいが、

『他譲』は、教えによらねば行い難い。

そして、

他譲すれば、自分という半円が相手の半円と融合して一円になる。

つまり、地域に他譲すれば地域と、顧客に他譲すれば顧客と・・・。

「わがためは人ため、人ためはわがため」—これが、翁の口癖だったという。

(2) 天道と人道

二宮翁の報徳の教えは、幼少から四書五経に親しみ、自らの体験に照らして反芻咀嚼し、翁独特の解釈を加えて、新たな「報徳の哲学」に構築したものである。したがって、翁の教えには、翁の発明になる言葉が数多く登場する。

翁の著作「三才金毛録」や「道歌」をはじめ、高弟たちの著作「報徳記」や「二宮翁夜話」や「二宮先生語録」などに多く記載されている。中でも「天道と人道」の理屈は、誰も建てえなかったもので、翁の思想を理解するに大切な教えである。

二宮四郎氏(尊徳翁の曾孫)は、神谷慶治編『譲の道』で次のように述べている。

◇天道は「奪」、人道は「譲」

「人の生息する世界には、二つの道があります。宇宙自然現象すなわち「天道」と人間社会の道すなわち「人道」です。

天道は自然であり、人間の力ではどうすることもできません。人間がこの世に現れる前は、天道だけでした。そこに出現した人間社会は、自然とは相反する道の均衡を維持しています。それを人道といいます。

すなわち、この世界には生きる方法が二つあるのです。一つは「譲る」であり、もう一つは「奪う」です。

天道すなわち自然の世界では、譲るという方法がありません。他から奪う方法でしか生きられないのです。

植物は、自分のためだけに根から水分と養分をとる。草食動物は、自分のためだけに葉や茎を食べる。肉食動物は、自分のためだけに自分より弱いものを食べる。

自然の世界では、お互いに「譲る」ということがない。「奪う」ことのみで生きていきます。「奪道」です。

ところが人間の世界では、お互いに譲り合わないと生きてはいけません。

人は一人では暮らせません。社会というものを作らないと生活できないのです。その社会を作る基礎にあるのが「譲道」です。

人は自然人、すなわち動物のままであれば奪で、他から奪うばかりです。社会を作ることができません。譲り合って初めてヒトの世界に社会ができたのです。人は動物、すなわち自然人から社会人になります。それを人間といいます・・云々 (傍線は筆者)

天道と人道の教えを、夜話の中から拾ってみたい。

【天道の中に人道を立てる】

「翁が言うには、およそ世の中は回転してやまない。寒さがゆけば暑さが来るし、暑さがゆけば寒さがくる。世が明ければ昼になり、昼になったかと思えば夜になる。また万物も生ずれば滅し、滅すれば生ずる。ちょうど銭をやれば品物が来るし、品をやれば銭がくるようなものだ。寝ても覚めても、居ても歩いても、昨日は今日になり、今日は明日になる。田畑も海山もみなそのとおり。ここで薪を炊きへらすほどは山林で生育するし、ここで食い減らすだけの穀物は田畑で生育する。野菜でも魚類でも、世の中で減るほどは田畑や川や海や山林で生育する。生れた子どもは時々刻々に年がよる。築いた堤は時々刻々に崩れる。掘った堀は日々夜々に埋まり、葺いた屋根は日々夜々に腐る。これがすなわち天理の常なのだ。

ところが人道は、これとは違う。なぜかといえば、風雨の定めがない。寒暑の往来するこの世界に、羽や毛もなく鱗や甲羅もなしに、裸で生まれ出たのだから、家がなければ雨露がしのがれず、衣服がなければ寒暑がしのがれない。ここで人道というものを立てて、米を善とし、稗などのハグサを悪とし、家を造るのを善とし壊すのを悪とした。みんな人のために立てた道だから、それで人道というのだ。天道から見るととき善悪はない。その証拠には、天道にまかせておけば田畑はみんな荒地となって、開闢の昔に帰ってしまう。なぜなら、それがすなわち天理自然の道だからだ。

天には善悪がない。それゆえ稲もハグサも差別せずに、種のあるものはみんな生育させ、生氣あるものはみんな発生させる。人道はその天理に従いながらも、そのうちでそれぞれ区別をして、稗やハグサを悪として米麦を善とするように、すべて人の身に便利なものを善として、不便なものを悪とする。ここまで来ると天理とは違って来る。なぜなら人道は人の立てるものだからだ。だから、ともすれば破れようとする。それゆえ、政を立てたり、教えを立てたり、刑法罰則を定めたり、礼法を設けたり、やかましくうるさく世話をやいて、ようやく人道は立つのだ。それなのに、これを天理自然の道というのは大きな間違いだ。よく考えるがよい」(夜話四六)

【人道は水車の中庸】

「翁が言うには、人道というものは、たとえば水車のようなものだ。その形の半分は水流に従い、半分は水流に逆らってぐるぐる回っている。丸ごと水中に入れば回らないで流れるだろうし、またすっかり水を離れれば回ることはありえない。仏教でいう高僧知識のように、世を離れ欲を捨ててしまったものは、水車の水を離れたようなものだし、また凡俗で教義も聞かず、義務も知らず、私欲一方に執着するのは、水車を丸ごと水中に沈めたようなもので、共に社会の用をなさない。だから人道は中庸を尊ぶ。水車の中庸は、ほどよく水中に入って、半分は水に従い、半分は流水に遡って、運転滞らないところにある。人の道もそのように、天理に従って種をまき、天理に逆らって草をとり、欲にしたがって

家業に励み、欲を制して義務を思うべきだ」(夜話四七)

【人道は欲を制して成り立つ】

「翁いわく、人道は人造のものだから、自然に行われる天理とは別のものだ。天理とは、春は生じ、秋は枯れ、火は乾いた方に燃え、水は低い方に流れるというように、昼も夜もめぐり動いて万古変らないものを言うのだ。ところが人道は、日々夜々に人力を尽くし、保護をして成り立つものだ。だから天道の自然にまかせれば、たちまち廃れて行われない。それゆえ、情欲のままにしているのは、人道は立たないのだ・・云々」(夜話四八)

【人道は作為の継続】

「天道と人道は、もとより区別が判然としているものを、混同するのは間違いだ。人道は努めて人力をもって保持し、自然に流動する天道のために押し流されぬようにすべきものだ。天道にまかせておけば、堤は崩れ、川は埋まり、橋は朽ち、家は立ち腐れとなる。人道はこれに反して、堤を築き、川をさらえ、橋を修理し、屋根を葺いて雨の漏らぬようにするのだ。身の行いも同様であって、天道は寝たければ寝、遊びたければ遊び、食いたければ食い、飲みたければ飲むという類だ。人道は眠たいのをとめて働き、遊びたいのを励まして戒め、食いたい美食をこらえ、飲みたい酒を控えて明日のために物を貯える。これが人道なのだ」(夜話五〇)

(3) 人道すなわち「報徳の道」

尊徳翁は、「人道とは、もろもろの恩徳—天地自然の恩徳と社会の人々の恩徳—に報いるために、自分の務めを果たすことである」として、次のように語る。

【人道とは恩徳に報いること】

「過去をかえりみれば、きっと恩を受けて返さなかったことがあろう。また徳を受けて報いなかったことがあるに違いない。報いることを思わない者は、必ず過去の恩を忘れて、目前の徳をむさぼり受けるものだ。だから、貧賤がその身を離れない。報いることを思う者は、必ず過去の恩を覚えていて、目前の徳を追い求めようとしない。だから富貴がその身を離れないのだ。なぜかといえば、恩を返し徳に報いるということは百行の元、万善の源だからである。

まず、体の隅々まで自由に動かせるのは《父母の恩》である。その恩に報いるのを《孝》という。禄位があって人に敬われるのは《主君の恩》である。その恩に報いるのを《忠》という。わが田を安らかに耕し、わが家に安らかに住んで、父母妻子を養うことができるのは《国家治世の恩》である。その徳に報いるのを《納税》という。穀物や野菜を産み出して人の身を養い、安らかに生活できるのは《田畑の徳》である。その徳に報いるのを《農事に励む》という。日用の品物が何でも欲しいときに手に入るのは《商人の徳》である。その徳に報いるのを《代金を払う》という。金を借りて用を足すことができるのは《貸主の徳》である。その徳に報いるのを《利子を返す》という。そのほか一々数え上

げたらきりがない。

こうしてみれば、「人道」とは《恩を返し徳に報いる》ということにつけた名前なのだ。どうして報いることに勤めないでよかろうか。(二宮先生語録六四)

すなわち

(恩徳)	(報いる)
父母の恩	孝行
主君の恩	忠
国家治世の恩	納税
田畑の徳	農事に励む
商人の徳	代金を払う
貸主の徳	利子を返す

【報徳訓】

報徳の教えを簡潔にまとめた『報徳訓』というのがある。

すなわち、

父母の根源は天地の令名に在り
身体の根源は父母の生育に在り
子孫の相続は夫婦の丹精に在り
父母の富貴は祖先の勤功に在り
吾身の富貴は父母の積善に在り
子孫の富貴は自己の勤労に在り
身命の長養は衣食住の三に在り
衣食住の三は田畑山林に在り
田畑山林は人民の勤功に在り
今年の衣食住は今年の産業に在り
来年の衣食住は今年の艱難に在り
年々歳々報徳を忘れるべからず (原著は漢文)

報徳社の集まりでは、これを全員で唱和するのが慣例になっている。

また、「報徳記」や「二宮翁夜話」や「二宮先生語録」の現代版訳注者・佐々井典比古の作になる「万象具徳」の詩がある。

【万象具徳】

どんなものにも よさがある
どんなひとにも よさがある
よさがそれぞれ みなちがう
よさがいっぱい かくれてる
どこかとりえが あるものだ

ものとりえを ひきだそう
ひとのとりえを そだてよう
じぶんのとりえを ささげよう
とりえとりえが むすばれて
このよはたのしい ふえせかい

末尾の「ふえせかい」は、楽しみの増える世界の意。

【徳に報いる出発点】

「わが教えは徳をもって徳に報いる道だ。天地の徳から、君の徳、親の徳、祖先の徳など、人々はみんな広大な徳をこうむっている。この恩徳に報いるのに、君の恩には忠、親の恩には孝というように、自分の徳行をもってする、これを報徳というのだ。

さて、この徳行を立てようとするには、まず自分自分の天禄の分限をはっきり知って、これを守ることが先決だ。だから私は、入門の初めにその者の分限を取り調べて、よくわきまえさせている。なぜかといえば、だいたい金持ちの子孫は、自分の家の財産が何ほどあるか、知らぬ者が多いからだ。私が人を教えるには、まずその分限を明細に調べて、お前さんの家株は田畑何町何反歩、この作徳金何両、うち借金の利子を何ほど引くと、残りは何ほどになる。これがお前さんの暮らすべき一年の天禄なのだ。このほかにどこからも取れず、どこからも入らない。この内で勤儉を尽くして暮らしを立てて、何ほどかの余財を譲ることをつとめねばならぬ。これが道なのだ。

誰でもこのように、入るを計って天分を定めて、音信贈答も、義理も礼儀も、みんなこの天分の内ですがよい。分内でできなければ、一切やめるがよい。あるいはそれを「けち」だという者があっても、それは言う方の誤りなのだから、気にかけるでない。なぜかといえば、この天分のほかには取るところもなく、入るものもないからだ。だから義理も付き合いも、できなければしないのが、礼であり義であり道なのだ。この道理をよくわきまえて、惑ってはならぬ。これこそ徳行を立てる出発点であって、おのれの分度が立たなければ、徳行は立たぬものと知るがよい」（夜話六）

ここに、まず「分度」を定め、分度内での暮らしをしっかりと立てる。そして「誠実」を基として「勤勉」に励んで余剰を産み出し、それを自分のためだけでなく、他人や社会のために譲る＝「推譲」してゆく生き方。すなわち「報徳」思想の根幹をなす「至誠」と「分度」と「勤勉」と「推譲」の実践が、きわめて平易に述べられている。

3、低成長時代における「報徳」の生き方

低成長時代を展望して、バブルは再現するだろうか、モノ不足が起こるだろうか、インフレになるだろうか、金利が上がるだろうか等々、それを論ずるのは本旨ではない。時々刻々に変る経済社会現象を論ずれば、一喜一憂して暮らすこととなる。

ある人が、「現代人の不幸は、マスコミに汚染されて、日々のニュースに一喜一憂するこ

とにある」といった。マスコミの性癖は、その面白主義と刹那主義にある。テレビとラジオで、居間や車中に遠慮なく、間断なく入りこんで、視聴者に「考える暇」を与えない。それに振り回されて、自分の居場所、存在する立地点を見失ってしまう。自分はそのようなことはないと思う人は、試しに1週間でも10日でも、テレビ、ラジオ、新聞を遠ざけてみるとよくわかる。リフレッシュと心得て山登りでもしてみれば、自分にもこんな静寂な時間があったのか、と気付くことは必定である。マスコミの報道する世界に、安易にのめりこまないように、一定の距離感すなわち「中庸」を保つことこそが大切である。

それはさておき、どう考えてみても、人口減少と低成長は孫子の時代、あるいはもっと長く続く。その間に「ノアの洪水」のような現象が起こり、沈没するかもしれない。そのようなことが起こらないことを祈りつつ、まずは生き延びてゆかねばならない。

以下、報徳思想の「四綱領」に即して考えてみたい。

その1 「至誠」

至誠については改めて申すまでもない。バブルの時代には、少々のウソをついても大目にみてくれたかもしれないが、低成長・ゼロ成長時代はそうはいかない。皆がシビヤになる時代なのだと認識して、誠実に生きること。そして、先ず自立して社会集団の中でまわりの人々から信用をされること。それに尽きると覚悟することが肝要である。

その2 「勤労」

私どもは、働くことは自分のためであり、あわせて「傍を楽にする」ことだと教えられて育ってきた。戦後、アメリカ化される風潮の中で、勤労観が西欧流に変わってきってしまった。さきに、翁の「自他振替」の話でもみたように、改めて「日本型勤労観」に立ち返るべきと思う。

日本型「勤労」観とは

夜話に次の一章がある。翁の親戚で下男に住み込んでいた川久保民次郎が、暇ごいをして国に帰るときに、言って聞かせたことばである。

【まず労力を譲る】

「私が若いころ始めて家を持ったときに、1枚のくわが破損してしまった。隣の家に行ってくわを貸して下さいといったら、隣の爺さんは、今この畑を耕して菜を蒔こうとするところだ、まき終わらねば貸してやれない、という。私は家に帰っても別にする仕事がないから、私とその畑を耕してあげましょうといって耕し、それから菜の種を蒔いてあげましょうといって、耕した上にまいて、その上で、くわを借りたことがある。そうしたら隣の爺さんは、くわにかぎらず何でもさしつかえのことがあったら、遠慮なく行って下され、必ず用立てましょう、といったことがあった。こんなふうになれば、百事さしつかえのないものだ。

そなたはまだ元気盛りだ。一晩中寝なくとも障りはあるまい。毎晩寝る暇をさいて、わらじ一足でも二足でもつくる。そうしてあくる日、開墾地に持って行って、わらじの切れた人、敗れた人にやる。受け取って礼をいわれなくとも、もともと寝る暇に作ったものだから、寝た分と思えばよい。礼をいう人があれば、それだけの徳だ。もし一銭半銭をくれ

る人があれば、これまたそれだけの利得だ。よくこの道理を感銘して、連日怠らなければ、一家確立の志の貫かれぬ筋合いはない。何事でも成就しないはずはない。私が幼少のときの努力は、これ以外になかったのだ。肝に銘じて忘れるでない」（夜話一三一）

【働くことは万病に効く薬】—稲盛和夫さんの話—

稲盛和夫さんは、著書『働き方＝なぜ働くのか。いかに働くのか』の中で、働くことは「万病に効く薬」と言われる。少々長いが引用したい。

私は、働くことは「万病に効く薬」—あらゆる試練を克服し、人生を好転させていくことができる、妙薬（素晴らしい薬）だと思っています。

私たちの人生は、さまざまな苦難から成り立っています。

自分が望んだり、招いたりしたわけでもないのに、思いがけない不幸が次々に襲ってきます。そのような苦難や不幸に翻弄されるとき、私たちは自らの運命を恨み、つい打ちひしがれそうになってしまうものです。

しかし、「働く」こと自体に、そのような苛酷な運命を克服し、人生を明るく希望にあふれるものにしていく、素晴らしい力が秘められているのです。それは、私自身の人生を振り返ってみても明らかです。

一所懸命に働くと、神様が知恵を授けてくれる。

テレビのブラウン管の製造に欠かせない部品「U字ケルシマ」の開発に、連日連夜取り組んで、それが成功したときの感激です。

来る日も来る日も、原料のフォルスセライト粉末の「つなぎの問題」をどうクリアするか、考えあぐねていました。

そんなある日、思いもかけないことが起きたのです。

その日、私は懸案の「つなぎの問題」を考えながら、実験室を歩いていたところ、何かに蹴躓いて転びそうになりました。思わず足元を見ると、実験で使うパラフィンワックスが靴にべっとりとついているのです。

「誰だ！こんなところにワックスを置いたのは！」と叫びそうになった、まさにその瞬間です。

「これだ！」

私はひらめきました。

早速、手製の鍋にファインセラミックスの原料と、そのパラフィンワックスを入れて、熱を加えながらかき混ぜて原料をつくり、型に入れて成形してみたところ、見事に形をつくることに成功しました。さらには、それを高温の炉に入れて焼くと、つなぎのパラフィンワックスはすべて燃え尽きてしまうので、完成品のU字ケルシマには不純物が全く残っていません。

あれだけ悩み抜いた懸案が、一気に解決していったのです。

今思い返してみても「神の啓示」としかたとえようのない瞬間でした。

もちろん、実際に解決策がひらめいたのは私自身です。しかし、それは一生懸命に仕事に打ち込み、くるしみ抜いている私の姿を見た神様が憐れみ、知恵を授けてくれた、そう表現するしかできないように思うのです。

私は、そんな経験をいく度も積んできたために、その後、ことあるごとに社員をつかまえては、「神様が手を差し伸べたくなるほどに、一途に仕事に打ち込め。そうすれば、どんな困難な局面でも、きっと神の助けがあり、成功することができる」と、よく話したものです。

私が開発したU字ケルシマはその後、テレビのブラウン管の製造に欠かせない部品として、松下電子工業から大量の発注を受け、傾きかけた会社を救う起死回生の小品として、会社の期待を一身に集めることになりました。

そのときの技術、実績が、その後の京セラ発展の礎となったと言っても過言ではありません。また、この、「最初の成功体験」によって、私は苦難の中にあっても、懸命に働くことが、素晴らしい運命をもたらすということ、幸いなことに実感することができました。・・・云々

変革は、流れる時間の中で徐々に起こるのではない。長い間に蓄積されたエネルギーが極限に達したとき、一瞬に爆発する。物理学でいう「シンギュラーポイント」である。

つまり、液体の水を火にかけると、火のエネルギーが次第に蓄積されて、水はやがて沸点に達する。すると瞬時に水蒸気という気体に変る。蛾は何ヵ月も、蛹のままで成長する。それが蝶に変るのは、一朝のことである。

勤労の行く先に、変革成就の喜びがある。

稲盛さんが、自分の体験から社員に「一途に仕事に打ち込め。そうすれば、きっと神の助けがある」と励ますのは、まさにそのことである。

その3 「分度」

分度といえば、儉約のことだとして敬遠する向きがあろう。ところが、全く逆なのである。収入に見合った支出の限度額、すなわち分度をきっちりと定める。そして産み出した余剰資金を、新たな投資と運用に振り向けるのである。

国の破綻した財政の現状は、さきに述べたとおり。公債発行は、まだまだ続いて国の借金が1千兆円となるのは間近である。1千兆円といってもピンとこないが、人口1億人とすれば、国民一人当たり1千万円の借金となる。一家5人家族のばあい、その借金は5000万円となり、巨大さを肌身に感ずる。それを国が肩代わりしているのである。先送りすればするほど、人口は減る一方なので一人当りはさらに大きくなる。

今後の人口減少社会を考えれば、景気循環の波で好不況はあろうが、税収がかつてのように拡大するとはとても見込めない。単年度のプラマリーバランス、つまり収入と支出の均衡を一刻も早く計らねばならない。それには、翁のいう「分度」を決定し、それを厳しく守っていくこと以外に方法はないのである。

個人においても同じこと。バブルが起こることを夢見てはならない。クレジット社会の風潮になれて、低成長期になっても、借金感覚が緩んでしまったままでは、取り返しがつかないことになってしまう。

その4 「推譲」

1400余年の昔、聖徳太子は「十七条の憲法」を定めた。

広辞苑には「和の精神を基とし、儒・仏の思想を調和し、君臣の道および諸人の則るべき道徳を示したものとある。

その第一条にある「以和為貴＝和を以って貴しと為す」のことは、人々に尊重され、代々語り継がれて、戦前までは日本人の誰もが知っていた。したがって、われわれ日本人には「和を貴ぶ」という精神が脈々として伝わってきたはずである。ところが、西欧流の個人主義の浸透によって、「和を貴ぶ」精神が軽んぜられるようになってきている。

他人との和を保つには、譲り合いの精神がなければならない。譲り合うのは、自分のためであり、相手のためである。尊徳翁の口癖は「わがため人ため」であったという。翁の教える「推譲」には自譲と他譲があることはさきに述べた。

さて、低成長期に「推譲」はどうなるか。推譲のうち、自譲は好不況に関係なく行われるが、他譲は不況時には懐にカネがないからでき難いという人がいる。それは譲るのを財に限れば・・・の話である。

仏教には「布施」がある。人に物を施し恵むことだが、地位や財産がなくても、誰もがいつでも容易にできる布施として「無財の七施」を説く。

※注・無財の七施

眼 施＝慈眼施。慈しみに満ちたやさしいまなざしで相手に接する

和顔施＝いつも和やかで穏やかな顔で人や物に接する

愛語施＝やさしい言葉、思いやりのある態度で言葉を交わす

身 施＝捨身施。自分の体で奉仕する、作業をしてあげる

心 施＝心慮施。相手への心配り、他人の痛みを知る心

牀座施＝自分の座を譲る、乗り物の座、地位をも譲る

房舎施＝風や雨露をしのぐ場所を与える、傘をさしかける

戦前の農村は押しなべてどこも貧乏だった。それでも総じて集落は平穏な共同社会（ゲマインシャフト）を保ち、向う三軒両隣には、分かち合い譲り合う精神があった。ところが、市場主義の浸透は、個人主義に偏り利益社会（ゲゼルシャフト）を発展させた。そして、相互扶助という良き伝統を薄れさせることとなった。都会の「隣は何をする人ぞ」が当たり前ようになって、そこに「他譲」の出番も薄れてしまった感がする。でも、失ってしまったわけではない。遺伝情報DNAは皆に伝わっているはずである。

低成長時代を心豊かに生きるために、二宮翁の「推譲」の教えを熟考し、良き遺伝情報DNAを呼び覚まし、活発化させねばならない。そのことが、財政破綻国日本が再生し、世界に誇れる「道徳の国・日本」を再建する土台石となることは間違いない。

4、むすび

学生諸君に接し、交流する中でつくづく思う。

私は、昭和恐慌のはじまった1930年（昭和5年）生まれである。小農の家に生まれ育ち、戦争の悲惨さを経験し、敗戦の混乱の中で「飢え」の学生生活を送った。恩師の教えで協同組合運動に開眼し、農協の仕事を40年勤めた。役員を退任後20年、数々の社会活動

に参画してきたが、今なお農協運動者を自認している。

二宮尊徳翁は、私にとって「心の師」である。事あるごとに、二宮翁だったらどう考えられたらどうか、どんな処方箋をお書きになるか、どう実践なさるだろうかと、常に自問自答してきた。心の師なので、ことさら他人に二宮尊徳を語ることはなかった。

ところが、世の変遷は今、前代未聞の人口減少社会となり、行く手にはいくつもの難問題が横たわっている。そのうちの「四つの貧困化」が私のアタマから離れない。二宮翁の教えを受けたい。翁がどんなに認識され、どういう処方箋をお書きになるか。それが本稿の問題意識であり、学生諸君と共に学びたいことなのである。

ただ、将来を託す学生諸君が、私たちの世代と大きく異なる点がある。

それは、彼らには、かつて西欧人からも畏敬された「道徳国家・日本」と「恥を知る日本人」のイメージが湧かないこと。一にも二にも歴史教育が軽んぜられたことによる。

戦後育ちは、民主主義と自由は教えられたが、伝統、道徳、倫理については教えられていない。私たちの世代にとって、道徳は空気や水のようにどこにもあるものだから、教えられずとも、知らず知らずのうちに身につけていた。したがって、GHQの占領政策で歴史教育が否定されても、日本の社会の底流にある「道徳」の流れは絶えないものと過信していた。これは、真に取り返しのつかないほどに大きな油断であった。(日下公人氏)

改めて言うまでもない。

人間の集団社会は、共同社会であるから、一定の定め(ルール)や礼儀・作法(マナー・エチケット)を守った方が、お互いに暮らしやすい。その定めや礼儀・作法を書いたのが「倫理」であり「道徳」だといえよう。それを強制するとき「法律」になる。「法」はルールであり、「律」は守ることを強制し、守らない者に罰を課するものである。

学生諸君に、過ぎてしまったことを言ってもはじまらない。

それよりも、彼らに財政破綻の尻拭いや、膨張する年金と介護など社会福祉費用負担や、親の果たすべき「子育て」費用まで公負担にするなど、こんなにも膨大なマイナス資産を残すようになってしまった。そのことを恥じるのみである。後世の歴史家は、私どもの世代を、戦後の混乱から日本を建て直した功労者と評価する一方で、きっと、子孫にツケを回す「無責任世代」と評するであろう。

これから生きる彼らに、どんな生き方を示せばよいか。それを、明確にして実践することが、危機に瀕している日本を、再生させるのにもつながる。

私たちは、悠久の歴史の中で、先祖代々その時々の苦難を克服して、生き残ってきた強いDNAを受け継いでいる。私はいま80だが、この私を形作り、日々に活動させている遺伝情報DNAの年齢は、人間発生以来の35億歳である。私の肉体は時々刻々に滅び、やがて死んで地球に返ってゆく、肉体に宿っている心も滅びるであろうが、私の遺伝情報DNAが滅びることはない。どこかで生き続けるはずである。「肉体は死んでも魂は残る」というが、私は「魂」の存在を考えずにはおられない。

現に、私の心の中に二宮翁を敬慕してやまないものがある。それが「二宮翁の魂」でなくて、いったい何だろう。求める心に応じてくれる魂があればこそその話である。

村上和雄博士も「魂」は存在するという。未だ科学では証明できないが、それを動かす大いなるもの、偉大なるもの＝グレートサムシングがあるといわれる。

若き日に、育種学の大家・故森永俊太郎先生に、稲の新品種を生み出す確率は20万分の1と聞いた。そこで先生に伺った。「確率だと、どこかで判断されるわけですが、そのときどんなお気持ちですか」と。先生は言下に「それは、もう『祈る』のみだよ。人事を尽くして天命を待つ、の心境だ」といわれた。

「祈る」は魂の領域である。大宇宙の元素たちよ、人事の限りを尽くしているここに集結してくれとの願いである。それに応えてくれたときに、神の助けがあったという。

稲盛さんが、社員に「神の助けがあるまで働け」と励ますのも、この境地であろう。

二宮翁夜話に次の一章がある。そのまま、学生諸君への餞の言葉としたい。

【現代の文化は前代の推譲】

「骸骨というものは、ほかは腐っても頭の骨とスネの骨は必ず長持ちしている。どうしてかといえば、頭はからだ全体の上にあって、もっとも功勞の多い頭脳を覆っており、寒さ暑さを受けることも一番多い。またスネはからだ全体の下にあって、全体を捧げ持っており、功勞が最も多い。人間が活着ている間に功勞の多かったところの骨が、死後百年を経ても朽ちずにいるということは感銘すべき道理だ。そなたたちも、頭の骨やスネの骨のように、長く朽ちないように努力するがよい。

わが国の祖宗はもちろんのこと、孔子や釈迦なども世を去って三千年にもなるのに、今もってなお「大成至誠文宣皇帝孔夫子」とか「大恩教主釈迦牟尼仏」とか称えられている。その人は死して久しくなりぬれど、名こそわが国まで流れ来て、なお聞こえたれ、であって、大いに感ずべきことだ。

およそ人の勲功は、心と体の二つの骨折りからできあがるもので、骨を折ってやまないときは、必ず天助がある。古語に「これを思いこれを思いやまざれば天これを助く」とあるが、これを勤めこれを勤めしてやまなければ、やはり天がこれを助けるはずだ。世間で、心も身も尽くして私心のない者が、必ず成功するのはこのためだ。およそ今の世の中に勲功が残って、世界に役立っているもの、人から称賛されているものは、みなことごとく前代の人々の骨折りなのだ。今日このように国家が富榮盛大なのは、みんな前代の聖賢君子が残した賜物であり、前代の人々の骨折りなのだ。骨を折れよ、そなたたち。勉勵せねばならぬぞ、そなたたち。(夜話一七七)

学生と輪読した「二宮翁夜話」の一つでも、彼らが体得し実践してくれれば、それに勝る喜びはない。